

能校靈均死幾多 能く靈均に校べて死するまで幾多ならん

(原文・訓ともに新釈漢文大系本『白氏文集四』に拠る。一六二頁)

新釈漢文大系本の「解題」には「萬州刺史楊焯厚に和して詠んだ四首の絶句、使君は刺史の敬称。其の一は「競渡」、つまりペーロンの年中行事について詠んだ詩」と説明があり「語釈」には「競渡」について「舟をこぐ競技、ボートレース、ペーロン。梁・宋懐の『荆楚歲時記』に「五月五日、競渡あり。俗に屈原が汨羅に投ずるの日、其の死所を傷むが為なり。故に並びに舟楫に命じて以て之を拯ふ」と。の説明が又、「放逐」「憔悴」については「楚辭」漁夫篇に「屈原既に放たれて、江潭に遊び、沢畔に行吟し、顔色憔悴し、形容枯槁す」と。の説明が、又、「靈均」については「屈原の字。『楚辭』離騷に「余に名して曰く正則、余に字して曰く靈均」と。の説明がある。

つまりこの白詩は、白居易自身が、江州に貶謫されている我が身を、屈原のそれになぞらえ詠んだ詩内容である。「汨羅」「放逐」「憔悴」「靈均」はすべて屈原の故事による措辞であることがわかる。一方、道真が「放逐」という詩語を使うその背景に讒言により貶謫され、汨羅に身を投じた屈原の故事を響かせていると明言してもよいと思う。

このことについて、滝川幸司氏は、次の一文を載せる。

「放逐」は追放の意であるが、司馬遷「報任少卿書」(『文選』41)に「屈原放逐せられて乃ち離騷を賦す」、賈誼「弔屈原文」(同60)に「屈原は楚の賢臣也。讒を被りて放逐せられ離騷賦を作る」とあるように、屈原が讒言によって追放されたことと関わって使用される。(中略)。道真のいう「放逐者」というのも、自らを屈原と重ねて表現していると考えられよう。屈原と同じように、無実にもかかわらず讒言によって「放逐」